名古屋大学医学部附属病院
丸山 彰一 病院長に聞く

名古屋大学医学部附属病院病院長に丸山彰一氏が就任した。「診療、教育、研究」の３本柱の充実を命題に、全国屈指の地域中核的病院としてリーダーシップを執りながら病院を運営。高度かつ地域医療の砦への期待にどう応えていくのか。患者に先進医療を提供し、優れた医師の養成、臨床研究などの質向上への課題も多い。丸山新病院長に課題と改革への取り組みを聞いた。

（聞き手は中原道文編集顧問）

丸山　彰一（まるやま・しょういち） １９６４年７月生まれ。８９年名古屋大学医学部卒業、中京病院で研修開始。コロンビア大学研究員を経て９７年名古屋大学大学院医学研究科卒業。２００３年同大学院医学系研究科腎臓内科助手、１１年同准教授、１６年から同教授。１９年同大附属病院副病院長、２４年４月から現職。

―病院長ご就任、おめでとうございます、所感を。

丸山彰一病院長　病院長の仕事は幅が広いという印象ですね。名大病院は診療、教育、研究のすべてにおいて地域リーダーの役割があり、東海地域全体を見渡して活動する必要があると強く感じています。

―目標、抱負をお聞かせください。

丸山病院長　世界に情報発信して最終的には名大病院の存在価値を認めていただくことです。そのためには、新しい医療の開拓を含めて診療、教育、研究の３本柱をしっかりと発展させていくことが責務だと思っています。臨床研究においては他の病院に比べてプラスアルファが求められており、任期の３年間にぶれることなくこの目標に向かっていきたいですね。

―創基 150 年余。長い歴史があります。

丸山病院長　世界への発信には歴史が重要です。地域の絶対的な信頼感はこの歴史があってこそで、先代からのつながりが脈々と続いています。医療の土台がしっかりしており、それ故に応援していただける方も多いと思っています。

―課題は何ですか。

丸山病院長　社会貢献を進める上で、足元の課題は病院の経営基盤を固めることですね。保険診療の報酬だけで病院経営をしていくのは厳しい。国から資金もいただいていますが、教育や研究への支援は十分とはいえません。

―教育、研究の質向上への影響が懸念されます。

丸山病院長　医学教育については、国際的にはアメリカが基準となっていますが、世界標準に合わせるためには、日本の臨床実習時間を増やす必要があり、医学部教員の負担が大きくなっています。働き方改革では、全国の大学病院に務める助教の医師の研究時間は１５％がゼロで、週５時間以下が５０％に上っている実態が文部科学省の調査で分かっています。

―対策をどうお考えですか。

丸山病院長　働き方改革で医師の働く時間を管理すると、タスクシフト（業務移管）の話になります。看護師さんも本来の仕事以外は別の人にシフトするため外部への依頼人数も増え、財源の確保が必要です。